様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 ２３ 日現在

機関番号：３３９３２
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2013～2015
課題番号：２５７８０５０４

研究課題名（和文）保育者の子ども理解の深化プロセスに関する実証的研究

研究課題名（英文）The Empirical Research on the Deepening Process of the Understanding of Preschool Teachers for Young Children

研究代表者
上村　晶（UEMURA, Aki）

桜花学園大学・公私立大学の部局等・准教授

研究者番号：６０５５２５９４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では,保育者の子ども理解の深化プロセスを明らかにした結果,次の成果が得られた。(1)初任保育者は過去体験や感情制御の困難さの影響を受けやすいこと,子どもをわかりたいという切望が転機となり深化していたことが見出された。(2)保育者を取り巻く社会的背景は,子ども理解の深化を抑制・助長する要因として影響を及ぼしていた。(3)保育者のキャリア発達に伴い,子ども理解の視点は多元的・持続的であった。(4)子ども理解の構成因として3要因が見出され,“理解の難しさ”は6年目以降に和らぐこと,“包括的相互理解”と“敏感性”は10年目以降に高まることが示唆された。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to clarify the deepening process of the understanding of preschool teachers for young children. The results are as follows. (1) It was suggested that novice teachers ware influenced by the past experience and the difficulty of the emotional control, and that the turning point for deepening process varied when they had strong motivation to understand child's mind more deeply. (2) The Social background around teachers had influence to suppress and promote the deepening of their understanding. (3) It was found that the preschool teacher's perspective for children became multifactorial and sustainable according with their career development. (4) 3 aspects of the understanding for children was identified. It suggested that "difficulty of understanding" decreases after 6 years, and "comprehensive mutual understanding" and "sensitivity" increase after 11 years of teaching experience.

研究分野：幼児教育学・保育学

キーワード：子ども理解　保育者　気づき　プロセス

１．研究開始当初の背景

乳幼児期の教育・保育において、幼児理解は保育の出発点である（文科省 2010）と提唱されており、保育者の専門性を考究していく上で、子ども理解の在り方や場面における瞬時の気づき・即断力が重要であると考えられる。従来の子ども理解研究では、子どもを見ようとする意識の向上（山崎ら 2011）、観察力を培う重要性（保養協 2015）など「保育者が子どもを理解する」という視座から観察・分析の力量を重視した知見が見られる一方で、保育者の子ども理解は当児とのかかわりを通して常に再構築される（岡田 2005）、子ども理解とは双方向性を備えていると同時に一時的なものであり、常に更新されていく（田代 2009）など、子どもとの相互作用に基づき常に子ども理解は変容していく可能性を示唆した見解も示されている。

このような子ども理解に関する先行研究を概観する中で、①保育現場における子ども理解の重要性は定説化されているものの概念や定義が不明瞭であること、②子どもと保育者のかかわり合いにおける子ども理解の深まりを検討するためは、具体的な子ども理解のプロセスを可視化する必要があること、③保育者のキャリア発達に伴う深化プロセスの全体像を明らかにする必要があること、などの課題が挙げられる。つまり、「子どもを理解する」とは、保育者から子どもへの一方向的なまなざしに基づく理解として捉えられがちであるが、子どもも保育者に対して多様なシグナルを発信する主体であり、保育者と子どもの関係は相互主体的である（鯨岡 2011）と考えられる。よって、保育現場に根差した子ども理解の在り様を「相互主体的な関係」という視点から問い直し、「子どもとわかり合おうとする関係を構築していくこと」という視座から検討することが重要であると考える。

また、集団保育の営みの中で個を見つめるという複雑な状況下において、意思決定の重要な要因となる「瞬時の気づき」「判断の根拠」も含めて子ども理解が深まるプロセスを可視化することで、契機や揺らぎなどの保育者の現実世界を描き出し、より具体的な子ども理解の転機やその背景・実際の手立てに迫ることも必要である。このような気づきに関する研究は国内では乏しいが、海外の実践に目を向けると、子どもの有能さやポジティブな側面に着目したNZの「学びの物語 Learning story（Margaret Carr, 2001））」という評価手法を活用することで子どもを肯定的に捉える視点獲得につながるという知見（大宮 2010）が示されている。よって、この手法を援用することは、子どもの主体性や有能さに目を向けた保育者の気づきの観点を明らかにする可能性があり、同時に継続的な調査をしていくことで深化プロセスを可視化することが可能となると推測される。

さらに、保育者のキャリア発達に伴って子ども理解の視点は単一の視点から複数の視点へと変容する（高濱 2001）という知見が存在するが、子どもと保育者が相互主体的な関係性を構築していく上で、子どもとわかり合えた実感やわかり合えない戸惑いはどのような段階を経て変化していくのかをより具体的に明らかにすることで、保育の専門家としての子ども理解を深めていく力量形成のプロセスを見出していくことも重要であると考える。

２．研究の目的

以上の課題意識を基に、本研究では客観的観察・分析・解釈に基づく子ども理解から脱却し、保育者と子どもの相互主体的関係に着目した鯨岡（2011/2006）の理論に依拠し、子ども理解を「子どもとわかり合おうとする関係性を構築していくこと」という視座から問い直していく。具体的には、子ども理解の深化プロセスを可視化する中で、保育者が子どもとわかり合おうとする際の気づきに着目し、思考過程や判断根拠を明らかにする。同時に、保育者の経験年数に応じた子ども理解の力量形成段階を明らかにし、保育者のキャリア発達に伴う子ども理解の深化プロセスの構造を見出すことを目的とする。

３．研究の方法

１）1年を通じた子ども理解の深化プロセス

1. 調査協力者：A 県内の保育園に勤務する保育者 6 名（経験年数：1～8 年）
2. 調査期間：2013 年 5 月～2014 年 3 月
3. 調査方法：保育者が調査開始当初に抽出した子どもに関するエピソードを、1 年を通じて学びの物語シートに即して記入してもらい、半構造化インタビューを行った。エピソード記述の視点は、抽出児の育ちの見とりと心情理解に着目して、子どもとわかり合えた場面、またわかり合うことが難しいと戸惑いを感じた場面に関するエピソードを記述するよう依頼した（各保育者合計 10～11 回）。
4. 本研究で学びの物語シートと半構造化インタビューを併用した理由：前述の通

り、本研究では、Learning Story に依拠した学びの物語シートによる記述を採用した。実際に NZ の多様な園を視察した際、Notice（気づき）・Reflection（省察）・What's Next（次なる手立て）の 3 視点から子どもを理解する上での気づきが喚起されていることが確認できた。しかし、記述方法は保育者の独自性に依拠しているため、最初の気づきの観点の明確化が難しいこと、記述の細やかさは個人差があることなどの課題も見られ、Learning Story の記述だけでは補いきれない気づきや内実があると判断し、本研究ではその詳細な部分に関しては保育者の語りから引き出すことを目的として、半構造化インダビューを併用した。

5. 分析方法：記述と逐語記録から得られた保育者と子どものやりとりにおける気づき（Notice）・省察（Reflection）・次なる手立て（What's Next）をそれぞれ分節化し、テーマ分析（Catherine. Kohler. R. 2014：伊賀 2014）を行った。また、複線径路・等至性モデル（TEM：安田・サトウ 2012）を用いて子どもと保育者がわかり合おうとする関係におけるプロセスを並行系列的に可視化し、保育者の BFP（分岐点）において、関係が促進した SG（社会的助勢）と抑制した SD（社会的方向づけ）に着目して分析・考察した。また、経験年数に応じた比較分析では、TEM 図を統合した上で、顕在化した子どもの行為（第 1 層：個別活動レベル）・気づきを内化した際の保育者の洞察（第 2 層：記号発生レベル）・洞察を手掛かりに捉えた当児の個別的理解の全体像（第 3 層：価値信念レベル）の 3 層に分類し、その構造に着目して比較・検討した。
6. 倫理的配慮：調査協力園・保育者・対象児の保護者に口頭で調査趣旨を説明し、個人情報保護を遵守して実施することを伝えた上で、承諾を得た。

２）保育者のキャリア発達に応じた子ども理解の深化プロセス

A）予備調査

1. 調査協力者：保育園長 147 名、保育園及び幼稚園に勤務する保育者 74 名
2. 調査期間：2013 年 11 月～2014 年 8 月
3. 調査方法：無記名式質問紙調査
4. 調査内容：まず、園長調査では、子どもを理解していく認知プロセスを細分化し、「意識」「気づき」「洞察」「省察」「判断」の 5 段階について、保育者に身に付けてほしいと考える経験年数の回答を求めた。また、保育者調査では、日々の保育実践の中で、①子どもとわかり合えたと実感した場面、②子どもとわかり合うことが難しいと実感した場面の 2 つの場面における具体的記述とその判断根拠を自由記述で求めた。
5. 分析方法：園長調査に関しては、キャリア発達に応じた子ども理解に関する力量形成段階を明らかにするため、χ2 検定及び重回帰分析を行った。また、保育者調査から得られたデータは、特に気づきと判断根拠に焦点を当て、定性型コーディング（佐藤 2008）及び KJ 法（川喜田 1970）によって分類した。その上で、経験年数の群別（L 群：1～10 年・M 群：11～20 年・H 群：21 年以上）におけるカテゴリー出現の差異を検討した。また、本調査に向けた項目設定の基礎データとして検討すると同時に、キャリア発達に応じた気づきや根拠の構造を分析した。
6. 倫理的配慮：調査趣旨を文書に記載すると同時に、全て質的及び量的データとして処理するため個人が特定されないこと、個人情報保護を遵守して研究を実施することを説明し、承諾を得た回答のみを分析対象とした。

B）本調査

1. 調査協力者：保育園に勤務する保育者 229 名
2. 調査期間：2016 年 1 月
3. 調査方法：杉村ら（2009）の指標を参考にしながら、既述の予備調査で得られた項目を加えて作成した子ども理解に関する無記名式質問紙調査（計 14 項目）
4. 分析方法：SPSSVer21.0jp を活用した因子分析、及びキャリア発達に応じた分散分析を実施した。
5. 倫理的配慮：A）予備調査と同様に研究趣旨を説明し、承諾を得た回答のみを分析対象とした。

４．研究成果

１）1 年を通じた子ども理解の深化プロセス

保育者 6 名の 1 年間にわたる調査結果から、以下のことが見出された。

1）初任保育者の語りを通じて、子どもとわかり合おうとする個別具体的な関係構築プ

ロセスの深化の構造を検証した結果、相互反発期・混乱期・停滞期・葛藤期・受容的理解期の 5 期に分類された。また、関係を構築していく際の転機や要因を検討した結果、以下の 4 点が見出された。

1. 当児のわからなさへの衝撃に基づいて子どもの思いを「わかりたい」と切望する保育者の意思が、深化プロセスにおける転機になっていた。
2. わかり合おうとする関係を構築していく際に、保育者自身の感情制御の困難さが随所に見られた。
3. 個人としての過去体験や価値観による影響を受けた子どもの見方をする傾向があり、個人としての価値観と保育者としてのあるべき姿の狭間で揺らぎが見られた。
4. 当児への肯定的な見とりにより、「保育者の子ども理解」と「子どもの保育者理解」が相互に作用しながら折り重なり合うように更新して深化していた。

特に初任保育者の場合は様々な葛藤や揺らぎが存在するが、保育者であると同時に様々なライフヒストリーを持ち合わせた個人であることに留意して育成支援をすることが、揺らぎを乗り越えていく一助になることも示唆された。

2）初任保育者 3 名の子ども理解における深化プロセスを構造化し、子ども理解のゆきづまりの背景要因と乗り越え方の要因を明らかにした。その結果、次の 3 点が見出された。

1. 保育者の当児への意識以外に、「保育者自身の指導責任感」「過去体験や個人の性格」「他児への意識過多」「他者からの助言」なども子ども理解の深化を妨げるゆきづまりの要因として挙げられた。
2. ゆきづまり場面において「今までの見とりの問い直しや自戒」「肯定的に捉えようとする意識転換」「わからなさへの落胆に伴う奮起」などの保育者自身の意識を後押しする要因を契機に、当児を受容的・共感的に受け止めかかわろうとする保育が優勢となることでゆきづまりを乗り越え、互いにわかり合えた実感を有する理解へと深化していた。
3. 保育者を取り巻く社会的背景においてもゆきづまりを抑制・助勢する要因が存在しており、「他者からの視線やプレッシャー」「不慣れな初任者生活」などはゆきづまりを促進してしまい子どもとわかり合おうとする関係へと深化していかない反面、「保育環境の瞬時的及び恒常的変化」「当児自身やクラスの雰囲気の変化」などは深化プロセスにおいてゆきづまりを乗り越える誘因として機能していた。

初任保育者は、特に顕在化する当児の衝撃的なネガティブな姿を契機にゆきづまりを感じやすいが、保育者自身の気づきや判断の過程だけでなく、社会的背景も深化プロセスに大きな影響を及ぼしていることが示唆された。

3）保育者の経験年数による比較分析を行った結果、両者の共通点として、発達的変化を捉えながら子どもの良さに視点を置こうとする向善性が見られた。その反面、両者の相違点は、経験年数に応じて以下の 2 点が見られた。

1. 子どもを捉える視点は、生活全般や家庭背景も含めて多元的であった。
2. 当児の個別的理解は、再構成を繰り返しつつ、例え想定外の姿に遭遇してもすぐに変容せず、維持され続けていた。

当児の個別的理解を深めていくプロセスにおいて、経験年数の少ない保育者は、遊びの様子や当児の姿など顕在化する事象から気づきを得ることが多かったが、経験年数の多い保育者は、家庭環境や生活全般など顕在化していない事象にも意識を向けた複眼的な気づきを契機に理解を深めようとすることが見出された。また、当児の個別的理解は、その時々の子どもの姿に応じて細やかに再構成されていくものの、保育者のキャリア発達に伴い「当児の良さへの信頼」「目に見える行為の裏側を見ようとする洞察」などの要因によって、些細なことですぐに変容することなく、維持し続けることが示唆された。

２）保育者のキャリア発達に応じた子ども理解の深化プロセス

A）予備調査結果と本調査項目の設定

1）園長調査結果から、①養成段階では「子どもへの意識や気づきの喚起」、②保育者 1 年目では「様々な事象に気づく力を磨き、見とりの手がかりとすること」、③保育者 2〜3 年目では「洞察・省察を手掛かりとした心情理解」、④4 年目以降では「多角的な見とりを手掛かりとした内面推測による深い理解」へと、養成段階から現役保育者に至るまでの各ステージにおいて身につけてほしいと考えている子ども理解の構成因が異なることが見出された。

2）保育者調査結果から、キャリア発達に応じて、①保育者の意図の先行や発信的なかか

わり→②子ども側に立った心情推察→③共に感情を分かち合おうとする関係構築→④相互主体的関係に基づく相互理解の実感へと変化していくプロセスが見られ、保育者の思いが子どもに伝わったか否かという根拠から、子どもの視点に立って子どもがどう受け止めているかという理解や、相互にわかりあえたか否かという実感を有する根拠へと変化する傾向が見出された。

以上の予備調査結果を踏まえ、杉村ら（2009）の質問項目における「子ども察知」「子ども分析」の指標を参考にしつつ、自由記述回答から得られたデータに基づき、「子どもへの意識と気づき」「集団と個への敏感性」「行為の意図理解と手立て考案の難しさ」「心情理解と個別的理解」「表面的理解と多角的理解」「保育者意図先行と通底的な相互理解」などを盛り込んだ全 14 項目を設定した。その後、保育者を対象とした事前調査で項目設定の精査を踏まえた上で、本調査を実施した。

B）本調査結果

1）全 14 項目を因子分析（プロマックス回転）した結果、3 因子が抽出された（累積寄与率 44.31%）。各因子の構造より、以下のように命名した。

①第Ⅰ因子：子ども理解の困難さ（子どもの個性の把握や行為の意味及び対応方法の難しさ、保育者意図の先行）

②第Ⅱ因子：包括的相互理解（子どもと保育者間における感情共有・相互理解・多角的な包括的理解）

③第Ⅲ因子：敏感性（意識・気づき・察知）

すなわち、子どもと対峙した際に、意識を向けて些細な行為を敏感に察知すること、子どもとのかかわり合いの中で理解の難しさを常に孕んでいること、その上で、目に見えない事象などにも意識を向けながら多角的かつ包括的に理解しようとし、互いに感情を共有したりわかり合おうとしたりすることの、3 つの構成要因が見出された。

2）キャリア発達に伴い保育者集団を 5 群（初任群：1 年目、若手前期群：2〜5 年目、若手後期群：6〜10 年目、中堅群：11〜20 年目、熟達群：20 年目以上）に分類した。上記で抽出された 3 因子が保育者のキャリア発達とどのように関連があるかを検討するため、保育者の経験年数×3 因子の一要因分散分析を行った結果、全因子において有意差が見られた（$^{**}p<.01$）。キャリア発達に伴う群間比較を行うため多重比較を行った結果、全ての因子においてキャリア発達に伴って高まる傾向が見られるものの、各群における差異にはそれぞれ有意差が見出された。具体的には、6 年目以降に理解の難しさは和らぐこと、10 年目以降に包括的相互理解や気づき・察知などの敏感性は有意に高まることが示唆された。

以上の結果から、保育者のキャリア発達に伴う子ども理解の深化プロセスは、経験年数が 6 年を過ぎたあたりから、保育者の意図が先行する・子どもの行為の意味を難しく感じたり手立てに苦慮したりするという“子ども理解の困難さ”が減少し、わかり合えないという困り感は少なくなっていくことが見出された。また、意識・気づきや察知などの“敏感性”と、子どもと保育者間の相互理解や感情共有などの“包括的相互理解”は、経験年数が 10 年目を過ぎたあたりから増加していくことが見出されたことを踏まえると、子どもとわかり合おうとするプロセスの深化は、ある程度の経験を積み重ねることによって深まりを帯びていくものであることが示唆された。多様な事象への気づき・察知などの敏感性の高まりが契機となって、理解の難しさが和らぎ、包括的な相互理解に至ると当初は予測していたが、本研究結果からは、保育者が経験年数を重ねる中で子どもとわかり合えない戸惑いを乗り越えようとすることで、多様な気づきが研ぎ澄まされ、新たな子どもの側面を見出したり個別的理解を深め維持したりしていくことにつながり、その結果、わかり合おうとする関係構築の深化へとつながるというプロセスが見出された。

以上のことから、初任・若手保育者の段階では、顕在化した事象に捉われず潜在的な子どもの良さの発見や気づき・ポジティブな見方を体得しながら、子どもとわかり合おうとする関係を構築しようとする意識の涵養が重要であると言える。そのような関係構築の意識を保育者自身が兼ね備えていくことにより、子どもとわかり合えない困り感が低減すると同時に、わかり合えた実感を伴うような相互理解や、子どもの新たなる良さの発見や気づきを得ることに至り、子ども理解がさらに深まっていくと考えられる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 4 件）

1）上村晶（2015）「保育者の子ども理解に関する研究動向（1）－子どもと保育者の関係性に着目して－」桜花学園大学紀要保育学部研究紀要第 13 号，19-36.

2）上村晶（2016）「保育者の子ども理解に関

する研究動向(2)－視点と方法論に着目して－」桜花学園大学紀要保育学部研究紀要第 14 号，31-47.

3）上村晶（2016）「保育現場が求める保育実践力の形成段階　―保育者の移行プロセスにおける保育の専門性とは―」高田短期大学育児文化研究紀要第 11 号，11-20.

4）上村晶（2016）「初任保育者が子どもとわかり合おうとする関係構築プロセス」保育学研究第 54 号（2），（印刷中）

〔学会発表〕（計 14 件）

1）上村晶（2013）「保育者の子ども理解の方法を考える　―子どもと理解し合う関係性の構築に向けて―」日本乳幼児教育学会第 23 回大会

2）上村晶（2013）「保育者の専門性としての子ども理解」―TEM による子ども理解の可能性―」愛知幼児教育研究会平成 25 年度 11 月定例研究会

3）上村晶（2014）「保育者の子ども理解のプロセスを探る（1）―ラーニング・ストーリーを手掛かりに―」日本発達心理学会第 25 回大会

4）上村晶（2014）「保育者の子ども理解を支える要因の検討（2）」日本保育学会第 67 回大会

5）上村晶（2014）「保育者の子ども理解に求められる力量を探る－保育現場が期待する力量形成とは－」中部教育学会第 63 回大会

6）上村晶（2014）「保育学生の子ども理解に関する調査研究」全国保育士養成協議会第 51 回研究大会

7）上村晶（2014）「保育者の子ども理解の方法を考える（2）―保育者の気づきに着目して―」日本乳幼児教育学会第 24 回大会

8）上村晶（2015）「保育者の子ども理解のプロセスを探る（2）－1 年を通じた子どもと保育者の関係性に着目して－」日本発達心理学会第 26 回大会

9）上村晶（2015）「保育者の子ども理解を支える要因の検討（3）」日本保育学会第 68 回大会

10）上村晶（2015）「初任保育者の子ども理解に関する研究－3 歳児リュウドウとの関係構築を目指したリナ先生の 1 年に着目して－」全国保育士養成協議会第 52 回研究大会

11）上村晶（2015）「保育者の子ども理解の方法を考える（3）－保育者の経験年数に着目して－」日本乳幼児教育学会第 25 回大会

12）上村晶（2016）「保育者の子ども理解のプロセスを探る（3）－初任保育者のゆきづまりに着目して－」日本発達心理学会第 27 回大会

13）上村晶（2016）「保育者の経験年数に伴う子ども理解の差異－2 歳児とのかかわりにおける比較分析から－」日本保育学会第 69 回大会

14）Aki UEMURA (2016) “A Study of the Relationships Between the Structure of the Understanding of Preschool Teachers for Children the Length of their Practical Experience in Japan” PECERA 2016 17th Annual Conference

６．研究組織

（１）研究代表者

上村晶（Aki UEMURA）
桜花学園大学 保育学部 准教授
研究者番号：60552594